



目次

- ・特別展『舎密から化学技術へ—近代技術を拓いた男・宇都宮三郎—』—— 2
- ・郷土の史跡めぐり—— 3
- ・郷土史調査レポート『桜城（拳母城）』—— 4
- ・心のふるさと無形民族文化財『宮口の行者まつり』—— 6
- ・夏休み企画レポート・発掘調査速報—— 7
- ・文化財シリーズ・資料館ニュース—— 8

宇都宮三郎肖像写真（『宇都宮氏経歴談』より）

セイミ 舎密から化学技術へ

近代技術を拓いた男・宇都宮三郎

宇都宮三郎(1834~1902)は、幕末から明治時代にかけて活躍した化学者・技術者です。尾張藩士の子として生まれた三郎は、砲術の修行を通じて舎密学(化学)に興味を持ち、独習します。

脱藩した後、幕府の洋書調所しらべどころに出仕した三郎は、「化学」という言葉を初めて公式に採用させるなどしました。また明治政府にも雇われ、セメント・耐火煉瓦の製造や炭酸ソーダの国産化・藍の製造法の改良・電柱の防腐処理実験など、数多くの化学・技術的な業績を残し、「日本近代化学工業の父」とも賞されます。

病気のため退官した後も研究への情熱は衰えることなく、醸造法の改良などに取り組みました。その他、福沢諭吉が創設した日本初の社交団体に協力したり、日本で初の生命保険への加入者第1号となるなど、多方面にわたる活動をしています。

宇都宮三郎はまた、数々のエピソードの持ち主でもあります。アンモニアの試験と称して、試験管に入れた「おなら」を当時参議であった大隈重信にか嗅がせたり、結婚式の当日でも化学の試験に熱中して新婦を顧みなかったという話は、その一端です。



宇都宮三郎の棺(写真): 幸福寺蔵
(三郎自身が生前に考案し死後収められた、防腐装置を備えた特殊な棺。今回は当時の新聞記事をもとに復元した棺を展示します。)

今回の展示では、宇都宮三郎の縦横無尽の足跡を、豊田市の幸福寺に伝わる遺品類や各地に残った資料などで紹介します。また日本における新聞雑誌の創始者

の柳河春三や、近代思想界の巨頭である福沢諭吉など、宇都宮三郎の周辺の人物との交わりから、近代の幕開けを担った三郎の人物像についても取り上げます。

また、展示期間中の土・日曜日には、化学体験(メッキ実験)コーナーを設けます。



宇都宮三郎の大礼服: 幸福寺蔵



宇都宮三郎佩刀拵: 幸福寺蔵

会 期: 平成13年11月3日(土)~12月2日(日)
入場料: 200円(中学生以下無料)

関連行事

講演会: 「宇都宮三郎の生涯と業績」
日 時: 平成13年11月24日(土) 14:00~
会 場: 崇化館公民館 参加費: 無料
講 師: 道家達将氏(東京工業大学名誉教授)

巴川通船計画の行方

のみ
河床に刻まれた鑿のあと

江戸時代、西三河において物資の輸送は矢作川の川船と馬の背による方法でした。川船の終点は矢作川本流では古鼠土場（市内扶桑町）、支流の巴川では九久平土場で、陸揚げされた物資は馬の背で奥地の足助、信州伊那谷方面に運ばれていきました。逆に奥地からは馬による荷物のほか材木を流したり、筏に組んで竹材などととも運ばれました。

天保年間、九久平村から巴川を遡り、上流の足助村まで、川底の巨岩を割り裂き流路を開き船を通し、莫大な富を得ようとする遠大な計画が立てられ、その一部が実行に移されました。以下にその経緯と痕跡を述べてみたいと思います。

計画を立てたのは巴川左岸の羽明村(市内豊松町)の名主、河合全右衛門で、天保12年(1867)の6月、工事の許可を幕府奉行所に願い出ました。願いの趣旨は九久平から足

助までの巴川は兩岸から険しく岩石が突出し通船不可能で、洪水時には流れが悪く水害を被っている。九久平からの陸路は山坂道で人馬での荷物の輸送は困難を極め、農間余業に差し支えが出る。故に巴川の巨岩を開鑿して足助まで船を通せば、物資の輸送は安易かつ、大量の薪炭、材木の輸送が可能となり、国益にかない、莫大な利益が生じる。工事は自費で行い、完成の暁には運上を徴収し、冥加金を上納すると書面にしたためています。ちなみに全右衛門は旗本・松平太郎左衛門家の御用商人であり、また九久平の旗本・鈴木家の経済に深く関わるなど当時、巴川筋の実力者で旺盛な経済活動をしていました。

この願いに対し幕府は実際に普請役に馬塚ぎなど利害関係を見分させたうえで許可しています。早速、着工したが難工事で通船できるまでには完成せず、わずかに石を割った鑿のあとが残る程度であるといわれてきました。

最近、実際に岩場に残る鑿の痕跡をもとめて所々を調べたところ、地図に示したように5ヶ所で発見することができました。驚いたことに川船の終着地近くの鵜ヶ瀬から鍋田、築山、石楠、足助町下左切まで続いていたこと

です。いずれの場所も

兩岸の山から

岩が突

き出した溪谷で、水運の難所であり、川の中央部の水流の多い位置で見られました。鑿のあとはおおよそ幅10、長さ15、深さ8cm前後で破線状になっていたり、実際に破碎され、破碎面に残る例や片割れが移動している例もみられました。

以上のことから足助、九久平間の難所を網羅していて工事が相当に進んでいた事実を示していると考えられ、たとえ通船までに至らないが、木竹の筏による運送や材木を一本々々流す管流しがより安易になったことは確実でしょう。そしてあのやり手の全右衛門さんがじっと見ていたとは考えられません。なんらかの利益がもたらされたでしょう。想像をめぐらせば天保15年に足助で始まった馬塚ぎと町方が口銭をめぐって対立した荷の口論争などに影響を与えたかもしれません。



鑿のあと(石楠町)

桜城（拳母城）

（豊田市元城町1丁目）

桜城は現在の豊田市駅東側の市街地にあたる区域にあった城で、幾度か建てられています。まずこの桜城の歴史的な経緯についてみてみましょう。

1604(慶長9)年拳母に入った三宅氏は戦国期の金谷城を廃し、1614(慶長19)年に陣屋を構えました。ここは建物の周囲に堀・土塁を巡らした程度小規模なものであったことが伝えられています。三宅氏は一度亀山に移った後、拳母に戻りますが、1664(寛文4)年に田原へ領地替えとなります。

三宅氏の異動後、1664～1681年の間拳母は幕府領になります。『拳母記』(1794年)の記事にはこの頃について「...拳母八 三宅侯始て築城ありて寛永年中より寛文初年頃まで城主たり、同国田原へ得替あり、其跡廢地となり田畑反歩起返し、其時御代官鳥山牛助殿支配となる、十八年程の内八古廓の土居の中に七ヶ町の郷蔵を作り置しよし、古堀八埋て田となり、其畔にては童とも魚を取りしと予父物語聞伝ふ、天和元年に至奥州白河より本多侯拜領になり、廢城の古堀を浚へ陣屋を建て屋鋪と唱ふ、此領主たる間凡六十四年程也」とあります。また、1682(天和2)年に作成されたと言われている絵図に堀がないことなどから幕府領の時期に堀は埋め立てられたことがわかります。

この後に本多氏が陸奥国から入りますが本格的な城郭の造成は行われず、旧来の堀を再度掘り直し、陣屋程度のものを構えたとされています。

1749(寛延2)年に本多氏に替って内藤氏が拳母藩に入ります。内藤氏は幕府から金4000両を与えられて築城計画を進めました。本格的な城郭計画であったことが幕府に提出された絵図の控えと考えられている「三河国拳母城築城絵図」などからわかります。桜城築城に関連する記事の一部を『拳母藩史』からみてみます。

1749(寛延2)年9月「御城築相始」

1751(寛延4)年9月「縄張相始」

1756(宝暦6)年2月「拳母御城築普請始ル」

1758(宝暦8)年5月「拳母城御殿地祭」「棟上」

1760(宝暦10)年5月「拳母城御多門棟上」

1765(明和2)年8月「所々破堤、城内床上二浸水、御多門太鼓櫓破壊」

1766(明和3)年5月「三州拳母城一重櫓出来」

1768(明和5)年6月「三州拳母城二重櫓棟上」

1769(明和6)年12月「拳母城二重櫓出来」

実質的な桜城の築城は1756(宝暦)年に開始され、現在残っている石垣はこの記事によると1766年に出来上がっています。しかし、この区域は矢作川の氾濫による水害をたびたび受けたことや農民などの騒動により城郭の造成はなかなか進まず、結局桜城は完成をみることはありませんでした。

度重なる水害により、内藤氏は1779(安永8)年には幕府に城の移転を願い出て、1781(安永10)年樹木台において七州城の築造が開始されることとなります。

桜城の遺構はほとんど埋没しましたが、二の丸の平櫓の石垣だけが現在まで残され市指定史跡として保存され、かつての城域の一部は桜城址公園として整備されています。

この櫓の石垣には築造時における銘が残され、北辺最上段の中央の石2つには「櫓建形」が刻まれています。これまで、この銘文について詳細が紹介されることはありませんでしたが、今年6月に郷土資料館では石垣に上がる機会があり、この銘文の写真撮影等の記録をとりました。





- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------------|------------|--------|---------|----------|---------|---------|---------|-------|-----|------------|--------|------|------|---------|---|--------|------|-------|---|------|----|--------|-----|-----|
| 寶曆七丁丑年櫓臺築造 | 石工棟梁山内紋右衛門 | 城下東町住居 | 生國泉州箱作村 | 明和二乙酉年建之 | 棟梁井上藤兵衛 | 勢州神戸宿走町 | 棟梁磯部権三郎 | 知多郡刀村 | 建形掛 | 材木入方 加藤弥兵衛 | 越戸村材木屋 | 石井友八 | 作事棟梁 | 永田次郎右衛門 | 掛 | 瀧口與右衛門 | 作事奉行 | 鈴木與七郎 | 掛 | 岡田團助 | 指圖 | 高木重左衛門 | 惣奉行 | 櫓建形 |
|------------|------------|--------|---------|----------|---------|---------|---------|-------|-----|------------|--------|------|------|---------|---|--------|------|-------|---|------|----|--------|-----|-----|

文字の刻まれた石の上面は磨かれてフラットで一部磨耗して判読が難しい部分がありましたが、ほとんどの文字はよく残っていました。北から見て、向って右の石(87×46cm)には「櫓建形」のタイトルと築城に携わった挙母藩の家臣の名と地元の業者名が刻まれ、左の石(64×48cm)には尾張・伊勢・和泉出身の職人の棟梁の名があります。

挙母藩の家臣については『挙母藩史』の記事と対照してみると、

- 高木重左衛門：明和3年 家老
- 岡田團助：宝暦14年 用人
- 鈴木與七郎：寛延3年 郡奉行
- 瀧口與右衛門：寛延4年 普請奉行

といった役職にあった人物であることがわかります。

また、1757(宝暦7)年に櫓の台を築造したこと、1765(明和2)年に櫓を建てたことがわかります。

城の石垣に築城時の記録が刻まれている例は市域の城郭では他に例がなく、これまでの文書・絵図などの記録を対比していく上でも興味ある記録であり、注目される資料といえます。

【参考文献】

奥田敏春
1992 「挙母桜城」『豊田の中世城館』
愛知中世城郭研究会 .

森 泰通
1994 「桜城(挙母城)」『愛知県中世城館調査報告Ⅱ』愛知県教育委員会 .

豊田市郷土資料館 編
1997 「挙母城(桜城)隅櫓跡」『豊田の文化財』
豊田市教育委員会 .

伊藤智子
2001 「挙母城築城」『豊田市の城下町展』
豊田市郷土資料館 .

(杉浦 裕幸)

行者まつりとチャラボコ

7月14日、宮口町では恒例の行者まつりが行われました。

行者とは、奈良時代に大峰山などの山岳を舞台に活躍した修験者役小角をいいます。役小角は孔雀明王経法の秘法により、不老不死と空中飛行の秘術を会得するとともに、一切の悪病、災いを除く神通力をもっており、修験道の開祖といわれています。

市内には拳母・高橋地区を中心に、役行者の石像が65体あります。医療が発達していなかった頃、病気の平癒や雨乞いの祈禱を行うなど、行者信仰が盛んだった様子がうかがえます。

かつては、多くの地区で、行者講を組織し大峰山へ代参していましたが、時代とともに講が中止され、その代わりに行者さんをお祭りするようになりました。



宮口神社参道脇の祠



行者石像

宮口の行者まつりでは、祈禱のほかに嘯子の奉納も行われます。

午後3時30分に嘯子の屋形を乗せた車が、白山地区と高崎地区をまわり、祭りの始まりを知らせます。

5時に屋形が宮口区民会館を出発し、一色地区を嘯しながら引き回します。道中で演奏する曲は「入れ言」ですが、広場やご祝儀をいただいた時は「ドロツク」や「祇園」を演奏し、一層高らかな太鼓の音が町内に響き渡ります。

行者さんの祠では、6時から静寂のなかで祈禱が始まり、無病息災・五穀豊穰を祈願します。やがて7時になると、町内引きを終えた屋形が祠に到着し、嘯子方や綱引きの子供たちなども集まり、ここからは賑やかなまつりへと変わります。

午後8時、子供たちにお菓子が配られ、まつりは終了します。



行者まつり屋形車の町内曳き

行者まつりで奉納されている嘯子は、神楽系の嘯子で、俗に「チャラボコ」と呼ばれるものです。チャラボコのルーツは、多説ありますが、源流は熱田里神楽と考えられます。神楽の嘯子が祭り嘯子に使われるようになり、地域の風習や風土、時代の流行などの影響を受けながら、変化・熟成したものが、いわゆる「チャラボコ」や「打嘯子」です。

チャラボコ・打嘯子は西三河を中心に分布し、神社の祭礼や天王祭（祇園祭、津島祭）で奉納されることが多く、行者まつりで奉納されるのはめずらしいケースです。

豊田には、岡崎方面から入ってきた矢作川水系のチャラボコと碧南・高浜方面から入ってきた境川水系のチャラボコがあり、江戸末期から昭和初期の全盛期には、その数は30を超えるほどでした。

なかでも、石野地区、滝見のチャラボコは、旭町の伯母沢地区へ伝承され、伯母沢流打嘯子の源流になったともいわれています。

そのほか、巫女神楽の嘯子や藤沢の舟万灯祭りの水神ばやし、拳母祭りや高橋地区の山車の山車嘯子、花車のチリカラなど、多様な祭り嘯子が伝承されており、まさに豊田は祭り嘯子の宝庫といえます。

これは、豊田が、三河沿岸部と奥三河、名古屋と岡崎の中間に位置し、矢作川や境川などの水系や飯田街道・中馬街道を介し、経済や文化の交流が活発だった証拠です。

こうした祭り嘯子は地域の貴重な伝統文化ですが、後継者難等のため、多くのものが消滅あるいは衰退していることは残念なことです。

(豊田地域郷土芸能研究会)

豊田の歴史を知ろう！

夏休み子ども週間



8月1日(水)～10日(日)「豊田の歴史を知ろう！夏休み子ども週間」を実施しました。資料館では遺跡から発見された土器片を手にとったり、クイズの答えを探してまわる夏休み中の子どもたちの姿が見られました。

特に人気があったのは、「火おこしコーナー」でした。一人で黙々とがんばる子、親子でがんばる方、時間がいないからとあきらめて、別の日に再挑戦する子もいました。みごと火種ができた子は、館内に氏名・学校名を掲示したところ、「自分も名前を書いてほしい！」とがんばる子もいました。期間中34人が火おこしに成功、古代の火おこしの大変さを味わいました。



また併せて「親子で発掘体験」「ワークショップ土偶づくり」の講座を実施しました。

「親子で発掘体験」には17名が参加。郷土資料館で発掘された資料を見学し、どのように発掘作業が進められるか等の説明を聞いた後、現在調査中の梅坪遺跡で発掘作業を体験しました。暑い中での作業でしたが、土器の破片を見つけた子もあり、貴重な体験となったようです。

「ワークショップ土偶づくり」には2日間で合計66人の親子が参加しました。土偶とは何か？どんな形があるか？といった簡単な説明の後、ロビーに展示された縄文時代の土偶を参考に製作が始まりました。子どもたちは思いのままに、おとなたちは戸惑いながらの作業といった感じでしたが、出来上がった作品はどれも力作ばかり、遮光器土偶やハート型土偶を真似たものや、独自の人型や動物、恐竜のようなものなど個性豊かな作品がそろいました。参加した親子は、お互いの作品を批評しあったり、共同で一つの作品を作るなどしていました。

発掘調査速報

○梅坪遺跡〔東梅坪町3丁目〕

梅坪遺跡は、縄文時代から室町時代に及ぶ西三河を代表する遺跡です。市内梅坪地区に広く展開しており、現在は、公園予定地（約350m²）について調査を行っています。

梅坪遺跡のおもな遺構は標高40m辺りにあります。山間地を流下した矢作川が、平地に入り、ゆるやかな流れとなった場所です。矢作川流域には、縄文から古代にかけての集落遺跡が点在していますが、その最上流部に位置し、物流の要衝地であったと思われます。

これまでに、約2ヘクタールの発掘調査を行った結果、本遺跡は縄文後期から室町時代までの複合遺跡であることが判明しました。竪穴住居327基、掘立柱建物50棟、土壇約500点、溝55条、井戸2基、敷石遺構など、累計1,000点に及ぶ多様な遺構が発見されました。

古墳時代後期には、豪族居館や高床倉庫など大型の建物が多数存在したこともわかりました。また、河漁を示すヤスのほか、4,500点もの土錘、230点の製塩土器のなども出土し、この地の繁栄が河川と密接な関係があったことは否めません。

さらに、墨書のある須恵器・灰釉陶器や陶製の硯が多数出土しており、奈良・平安時代には、官衙的性格をもった重要な集落であったことがうかがわれます。

発掘現場では、いまのところ、幅50～60cmの中世の溝跡3条と古代から中世に至る落ち込みが確認されており、土錘・青磁・天目茶碗・山茶碗などが出土しています。

引続き、古代の層の探査を行う予定です。どのような遺構が見つかるか待ち遠しいところです。



中世の溝跡

名鉄三河線西中金駅の北側の杜に、岩倉神社があります。舞台はこの神社の境内入り口あり、神社本殿に相對するよう北側に向けて配置されています。



農村舞台は、江戸時代後半から明治時代中頃にかけて、全国各地で盛んに建てられ、数少ない農村の楽しみとして、住民による芝居や歌舞伎、地方まわりの一座による人情ものや股旅ものが興行されました。

この舞台は江戸時代後半の文化5年(1808)に建築されたもので、その後、明治28年(1895)に、大掛かりな改修が行われました。最大の特徴は、中央部にある直径5.45m(18尺)の回り舞台です。その他にも、セリ引き装置や太夫座といわれる三味線や義太夫を演じる小空間を備えています。このような高度な舞台機能を残している点で、貴重な農村舞台の遺構といえます。

文化財シリーズ



岩倉神社舞台
(市指定文化財)

しかし、昭和39年を最後に映画やテレビの普及など、大衆娯楽の多様化により、地芝居は急激に衰退しました。岩倉神社舞台も昭和30年代後半ころから、使用されておらず、舞台や壁などの損傷が目立つようになったため、ことし、中金自治区によって修復工事が行われました。

資料館NEWS

○シデコブシを文化財に指定

琴平町のシデコブシ群生地を豊田市の文化財(天然記念物)に指定しました。シデコブシはモクレン科に属する落葉性の低木で、3~4月頃、7~10cmの白や桃色の花が咲きます。日本固有の遺存種で、自生地は愛知県・岐阜県・三重県にほぼ限られ、絶滅のおそれのある貴重種です。群生地を地区指定し、環境の保全を図っていきます。

○台唐(だいがら)を復元

台唐は玄米を精米する道具で、足で杵の柄を踏んで臼の中の玄米をつき、ヌカをとる仕組みになっています。復元した台唐は、民俗資料館にあります。実際に動かすことができるので、体験してみてください。

○企画展「とよた発掘ファイル2001」終了

5月18日から開催しました企画展「とよた発掘ファイル2001」は、9月2日に終了し、2,032名の方にご覧いただきました。1998年から2001年にかけて発掘調査した4つの遺跡を、出土品展示や写真パネルで紹介しました。いずれも初公開の資料で、いにしへの豊田の歴史に触れていただけたと思います。

○実習生受入れ

7月5日から13日まで、博物館学芸員をめざす大学生14名が、郷土資料館で実習を受けました。資料の撮影や展示など、資料館で行われているさまざまな業務を体験・実習しました。

利用案内

開館時間 9:00~17:00

休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館)、年末年始

入場料 無料(ただし特別展開催中は有料となります)

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分

愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ 徒歩17分

■豊田市郷土資料館だより No.37■

平成13年10月10日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎(0565)32-6561 FAX(0565)34-0095

E-mail: rekihaku@city.toyota.aichi.jp